

沈黙に向き合う

沖縄戦聞き取り47年

(15)

石原 昌家

1978年、玉城村(現・南城市)の糸数出身で学校教師だった知念太蔵さんに初めて会った時のことだ。知念さんは戦時中、九州に疎開していた。戦後、疎開先から糸数に戻ると、人々のある異変に気付いたという。

糸数アブチラガマ ①

糸数家は5月1日から6

も残されていた。

文化

壕から住民銃殺

戦後の集落覆う疑惑

集落の人々は日ごろ仲がいい。しかしキビリりのユイマール(共同作業)などの後に酒が入ると、住民同士でたびたび口げんかが起きたという。口論している内容はまったく分からず、誰もけんかの経緯を語ることはなかった。

伊是名島と同様に糸数集落でも住民が非国民視・スパイ視されて虐殺された事件が起きていた。このたチラガマ(糸数壕)での出来事を知った。もしかすると、げんかの原因は沖縄戦中に地元で起きたことと関係があるのではないかと思いはじめた。

自分まつたく知らないムラの戦時中の話なので、沖縄戦中にアブチラガマにいた伯父さんに尋ね

使用されていた。しかし45年2月から4月30日まで、日本軍の洞窟陣地壕として使用された。壕内には2階建ての家を建て、近くの製糖工場にモーターを設置し、壕内に電柱を建て、電灯ももっていた。南風原陸軍病院から糸数壕に派遣された看護要員のひめゆり学徒は、壕内に電灯がついていることに驚いた。ただし、1日だけだった記憶だ。

食糧が残されていた。このため倉庫の監視役として監視兵4人が壕にとどまっていた。しかし迫ってきた米軍に監視兵3人が次々と射殺された。この時点で糸数壕に残っていた監視兵は上妻伍長1人となる。上妻伍長は避難住民と一緒に立てこもることにした。壕内には小川が流れており、日本軍は井戸も掘っていた。このため水は豊富にあり、さらに大量の食糧も残されていた。

度、聞き取りに快く応じてくれた。それだけではな「これも読むように」と、壕内の重傷患者で、奇跡的に生還した元日本兵・日比野勝廣さんの手記も貸してくれするなど、調査に非常に協力的だった。

沖縄戦当時、洞窟内が軍民一体化した糸数壕は、糸数集落北東側の外れにある自然の大洞窟だ。1944年10月の十・十空襲以降、当初は住民の避難壕として

そこで上妻伍長は米軍の侵入などを警戒するため、壕内に監視所を設けた。日本兵と住民男女2人1組に銃を持たせて見張らせ、24時間の監視態勢を敷いた。そして「壕内の避難民は壕の外へは絶対に出さない。壕から出るやつは全員撃ち殺す」との方針を住民に伝えたのだ。

避難住民の代表格だったSさんも兵事主任だったTさんも共に「上妻伍長の言

うように外へ出て米軍の捕虜になったら殺される。だから出ていけない方がいいだろう」と判断していた。つまり壕内は1人の伍長と地元有力者が避難民全体を支配下に置く「帝国日本」と化していた。

しかし壕内では侵入を阻止するための見張り人が入り口に銃口を向けていた。そのことを知らない住民3人が次々と入り口で銃殺されたのだ。

殺されたのは20代の母親、40代の防衛隊員の男性、50歳の男性の3人だ。20代の母親は仲村集落の住民が多く隠れているのを知っていた。このため顔見知りの自分が撃たれるはずはないと思っただろう。男性は名前を名乗りながら「自分の食糧を取りに来た。だから撃つてはいかんよ」と大声で叫び壕に入ろうとした。しかし中からは容赦なく銃弾が飛んできて、男性の命を奪った。



アブチラガマ(糸数壕)。日本軍が掘った民家裏の出入り口(南城市玉城字糸数(2015年撮影))

3人は監視所にいた見張りの日本兵が避難民によって射殺された可能性が高い。しかし誰が銃撃したのかは分からない。地元では戦後、銃口を向けた人が誰だったのかを巡って臆測を呼んだ。そのことが名譽毀損の裁判で争われる事態にまで発展した。

疎開先の九州から糸数に帰ってきた知念さんが感じた住民の異変とは、この虐殺をめぐる生まれた疑惑の原因があったようだ。(沖縄国際大学名誉教授(次回は4月13日掲載))